

食育のふるさと阪谷をよくする会

1 基本データ

- 地区名 阪谷地区
- 地区人口 1, 390人 (H30.1.1 現在)
- 世帯数 452世帯
- 面積 約31.2km²

阪谷地区は大野市の北東部、白山山系の経ヶ岳の麓に位置し、西は九頭竜川を挟んで富田地区、北は勝山市、東は五箇地区に接している。

集落は18。昭和29年の町村合併により、阪谷村が大野市となる。

標高250m～500mの中山間地域で、大野市の中でも雪が多い地区で、面積の3分の2は山林であり、農地は圃場整備が進み広大な棚田となっている。

六呂師高原には、広さ220ヘクタールの奥越高原牧場、自然保護センター、青少年自然の家等の県の施設やミルク工房奥越前等の市の施設を有する。

- 実施主体 食育のふるさと阪谷をよくする会

2 現状と課題

■人口減少

阪谷地区の人口は、最近4年の状況を見ると年間約40人ずつ減少している。地区の高齢化率は大野市平均を上回っており、自然減少はこしばらく高い割合で続いていくと思われる。そのような中、人口減少による地域力(ヒト・モノ・カネ)の低下を補う手段として、地域内へ人を呼び込み、交流入口を増やすことが、地域力回復のキーワードになってくると思われる。

■交流人口が増大する可能性

六呂師スキー場跡地の整理がついた事を契機に、平成27年10月に県、市、関係団体等で構成される六呂師高原活性化推進協議会が発足し、六呂師高原の再開発に向けて動き出し、平成28年度から県、市によるハード・ソフト両面による整備が行われることとなった。県は、平成29年の六呂師全体の入込目標を平成26年の11万6千人から約7万人多い18万人と設定している。また、中部縦貫自動車道

永平寺大野道路が平成28年度中に開通し、大野油坂道路も8年後に開通する見込みとなっている。また、道の駅「(仮称)結の故郷」の整備を平成32年度の供用を目標に進められることとなっている。

さらに、平成30年度に開催される福井しあわせ元気国体では、自転車ロードレースのコースの大半が阪谷地区を通ることとなっており、観戦者や応援者が多数阪谷地区を訪れることが予想される。これらのことを交流入口の拡大と地域力の回復につなげるチャンスと捉える。

■点在する観光施設の連携

六呂師高原を抱える風光明媚な当地区内には、「六呂師高原スキーパーク」、農業体験やそばうち体験ができる「スターランドさかだに」をはじめ、「ミルク工房奥越前」、「福井県自然保護センター」等多くの体験施設、観光施設が立地している。この施設を結び付けたエコツーリズムが地区の活性化のキーポイントになってくると思われる。

そのためには、地区内各施設の連携と外部の人との交流に対する意識の啓発と魅力的な体験プログラムの開発が必要である。

■課題

このような交流人口が増大する可能性と恵まれた立地条件を生かすためにも、安心安全な「有機の里」として他地区との差別化が重要であり、いかに交流入口を増やす仕組みをつくるか、また地区住民の「おもてなし」の意識をどのように醸成していくかが今後の課題である。

3 事業の内容

【交流人口の拡大による地域活性化を図る。】

【「食と農と文化の里づくり」で地域活性化を図る。】

【さまざまな事業を通して、地域の人材育成とふるさと意識の醸成による地域力の向上を図る。】

を基本目標とし、①雪まつりの開催、②収穫体験ツアー実施による情報発信、③農産物の加工品開発と販路拡大、④食育の祖ゆかりの地として食育の推進と啓発活動、⑤陶芸の魅力づく

りに取り組んだ。

①雪まつりの開催

ながーい雪のすべり台は、ちびっこ用のなだらかなコースとスピードが出る急なコースの2基設営した。急なコースには絶えず順番待ちの行列が出来ていた。

巨大かまくらは、直径約5メートル、高さ約4メートルの巨大かまくらを会場中央に設営した。

スノーシュー体験は、奥越前まんまるサイトの協力を得て、専門家による会場周辺の雪原や林間のツアーが実施できた。1日目約30名、2日目約70名の参加があった。

雪だるまづくりコーナーは会場内にたくさんの雪だるまができ、会場の雰囲気盛り上がった。

今回新しい企画として、六呂師高原青少年自然の家と協力し、会場内でもりのろくちゃんスタンプラリーを実施した。小さい子供を連れた家族連れに好評の企画であった。

阪谷のこだわり野菜の大なべを一日200食限定で振る舞い、両日ともあっという間に無くなってしまった。

阪谷の食のお店コーナーでは、カレーライス、からあげ、ぜんざい、おそば、おもち、飲み物などを販売し、カレーライス、からあげはすぐに売り切れた。

また、地元農産物を加工販売する2グループも出店し、おやき、笹寿司、おにぎり、あまざけ、おしるこ、コーヒー、お菓子類を販売し、盛況であった。

今回、新しく、地元のグループに声を掛けて、屋外にてとんちゃんなどの販売を行い、日曜日はいくつもの商品が完売した。

冬期間に親子連れで気軽に楽しめるイベントを実施しようと、地元住民が主体的に立ち上がり、何度も実行委員会や打ち合わせを重ねて企画してきたが、天候不順での積雪不足により開催が危ぶまれた。しかし、恵みの雪が降り無事に開催でき、積雪も昨年を上回る量があり、会場設営も当初予定していた内容を行うこと

ができた。

豪雪地域においてやっかいものの雪を、観光資源、地域資源ととらえ、地元の核となる施設であるスターランドさかだにを活用して実施でき、2日間で500人近い来場者があり、イベントの部、グルメの部とも非常に賑わい、多数の交流人口の増加が図られた。

準備からイベント当日の運営まで、食事メニューの仕込みやすべり台のコース整備など、地区民あげてイベントを実施し、地域住民の交流も深まり地域力の向上につながった。



②収穫体験ツアー実施による情報発信

有機の里阪谷の魅力を体感できる体験ツアーとして10月に「阪谷の魅力!体験ツアー」と題して、日帰りのモデルコースを企画した。

これは、阪谷地区のPRと交流人口拡大を狙った事業である。

企画内容は、・大きな岩めぐり、・そば打ち体験、・野菜収穫体験、・陶芸体験といった体験メニューを取り入れたコースとし、新聞広告で参加者を募った。この中でも、野菜収穫体験、陶芸体験を新たな企画として位置付けた。

しかし、募集開始から1週間経過しても参加者は2名どまりであり、今後も増える見込みがないことが予想されたので、残念ながら実施を断念した。

この体験ツアーは、阪谷地区が持つ観光資源等、お客を呼べる素材が何かと言う観点でのパイロット事業として実施を狙ったが、残念ながら反応が無く失敗に終わった感がある。企画にいろいろな物を詰め込みすぎて、方向性が広がりすぎてしまったのが、逆に参加に結びつかな

かったかもしれないので、体験メニューの方向性をもう少し絞った方が良かったかもしれない。

③農産物の加工品の開発と販路開拓

加工品の開発については、さかだに特産工房が、加工技術の向上、新商品の開発および販路開拓を目標に活動を進めてきた。

平成28年度に栽培した雪の下人参を収穫し、ジャムに加工してみたところ、大変新鮮でおいしかったため、この雪の下人参のジャムの商品化に挑戦した。

掘った人参をよく水洗いしてから蒸し、細かく刻んでから煮詰めた。そうしてできたジャムを瓶詰し、煮沸して殺菌減圧するため、「缶詰又は瓶詰食品製造業」の営業許可を取得し、加工技術の向上に努めた。

そういった中で、大野市雇用創造推進協議会が土産品を開発するので参加しないかという誘いがあり、試食をしてもらったところ好評であった。「ふふふおおの」ブランドの土産品リストに加えてもらう事ができたため、商品化への動きが加速した。

販路としては、ふふふおおのブランドとして、北陸自動車道北鯖江PA、ハピリン福福館、平成大野屋結楽座および阪谷地区内にある喫茶ひまわりで販売することとなった。

さらなる知名度アップと販路拡大を狙い、イベントなどでアピールするためののぼり旗などを作成するとともに、他の商品を含めた総合リーフレットを作成した。

④食育の祖「石塚左玄」ゆかりの地啓発活動

食育の祖「石塚左玄」の先祖の墓所が、阪谷地区（萩ヶ野区）にあることから、阪谷地区で石塚左玄が唱えた『食育』を広めていこうと石塚左玄の訓えに基づいた料理教室を年3回開催した。有機肥料を使い、化学肥料や農薬を使わない阪谷産農産物をおいしく食べる方法や食育の祖「石塚左玄」の訓を通して、「食育」の重要性を地区内外に広めることができた。



⑤陶芸の魅力づくり

自主グループ「越前おおの阪谷桃木窯」を中心に、毎月第1・3木曜日に中村鐵遷氏（勝山市在住）を講師に招き陶芸教室を開催した。

陶芸教室では、手捻りによる作陶技術を習い、受講者の技術がさらに向上した。

陶芸の魅力づくりについては、拠点施設がかなり整備されたことから、陶芸が当地区における観光体験プログラムの一つとして実施できるよう、関係者と協議をし、体験ツアー（前述）の一つのメニューとして企画出来たが、残念ながら申込者少数の為実施に至らなかったため、今後も引き続き関係者と実施に向けて協議していきたい。



4 事業の成果

他地区に誇れるイベント、文化、産業を創造し、魅力的で元気な「ふるさと阪谷」を創出するため、交流人口の拡大と受け入れ態勢の充実を図り、おいしい食べ物、有機の里で作られた

農作物、陶芸文化のさらなる定着を阪谷地区全体の活性化に繋げ、また、様々な事業を通して地域リーダーを増やすことと阪谷をもっと好きになってくれる人を増やしたいという目標で、様々な事業を実施してきた。

具体的な事業としては、①雪まつりの開催、②収穫体験ツアー実施による情報発信、③農産物の加工品開発と販路拡大、④食育の祖ゆかりの地として食育の推進と啓発活動、⑤陶芸の魅力づくりを実施した。

① まつりの開催

冬期間に親子連れで気軽に楽しめるイベントを実施しようと、地元住民が主体的に立ち上がり、何度も実行委員会や打ち合わせを重ねて、この雪まつりをどのようなイベントにしたいのかという根本的な議論から、細かいイベントの企画、スタッフの配置などを議論してきた。

豪雪地域において、やっかいものの雪を観光資源、地域資源にとらえ、地元の核となる施設であるスターランドさかだにを活用して実施でき、2日間で500人近い来場者があり、イベントの部、グルメの部ともに賑わい、多数の交流人口の増加が図られた。

実行委員自らの協賛金募集活動、前日から行った食事メニューの仕込みやすべり台のコース整備、様々な部署のリーダーになった方のリーダーシップが随所にみられ、地区民が主体的にイベントを運営できたことにより、地域住民同士の交流がさらに深まり、このことで地域力の向上と地域の担い手となるリーダー育成につながったことが大きな収穫であった。さらに、多数の来場者を笑顔でお迎えし、このイベントを楽しんでもらおうという姿勢を持ったイベント運営ができたことにより、地区住民のおもてなしの意識の醸成に貢献できたことも大きな成果である。

②収穫体験ツアー実施による情報発信

本ツアーは、参加者少数の為、実施を断念したが、収穫体験、陶芸体験を新たに企画することができ、当地区において、収穫体験に協力いただける農家、陶芸体験に関われるスタッフを掘り起こすことが出来たのは成果であった。

③農産物の加工品開発と販路拡大

本事業には、さかだに特産工房が取り組んだが、昨年度本交付金を活用して栽培している雪の下人参の商品化に成功でき、大変有意義な成果となっている。

また、本商品は、北陸自動車道北鯖江PA、ハピリン福福館など市外に販路を設けることが出来た事により、地区外への情報発信にもつながっている。

④食育の祖ゆかりの地として食育の推進と啓発活動

本事業では、阪谷地区とゆかりがある偉人である、食育の祖「石塚左玄先生」の人となりを知らしめるために、石塚左玄先生の訓えに基づいた料理教室を開催した。この料理教室には阪谷産有機野菜を中心に使用しており、また、訓えの実践により、阪谷地区の食と農の発信と食育の重要性を広めることが出来た。

⑤陶芸の魅力づくり

阪谷地区における文化面での交流人口の拡大を図る手段として、「陶芸の魅力づくり」をキーワードに、越前おおの阪谷桃木窯グループと連携し、陶芸教室の実施を足掛かりに阪谷地区における陶芸文化の広がりや交流人口の拡大を図った。

大型の窯に続いて、小型の窯も整備できたことから、作陶から焼き上がりまでのサイクルの短縮につなげられ、より一層手軽に陶芸体験が実施できる体制づくりが出来たことにより、阪谷小学校の総合活動授業にも作陶を取り入れてもらう事ができ、阪谷地区内で陶芸文化が確実に広がっていることが実感できた。

また、阪谷地区で採取された粘土での作陶も成功し、阪谷産粘土でのメイドイン阪谷産焼き物の製作も実現した。

5 今後の展望

「雪まつりの開催」については、本イベントの運営スタッフに、地区全住民の約1割近い人数が従事したが、従事スタッフにも高齢化の波が押し寄せてきているので、今後、このようなイベントに若い世代に出てもらえるか、いかに世代交代を図るか、さらなる自主性を発揮してもらえるか、これが地域イベントを存続していく上で大きな課題と感じた。

「収穫体験ツアーによる情報発信」においては、企画、広報宣伝、集客、ツアー実施と商業的な要素もある事から、企画から実施まで、関わる人材または実施主体について再考が必要かもしれない。

「農産物の加工品開発と販路拡大」においては、特産工房が前年に商品化した「乾燥野菜」シリーズに引き続き、雪の下人参ジャムの商品化に成功した。今後も本事業を活用し、地元農産物等を活用した商品開発に取り組んでもらい、阪谷地区の産業の創造と地域活性化に繋げ、このことで有機の里阪谷の農作物がブランド化することで、さらに需要が高まり、農業所得が少しでも高まることを期待したい。また、今後も、引き続き商談会や各種イベント、物産展に積極的に参加し、ブランド化を推し進める後押しをしたい。

「食育活動の推進」においては、食育の祖「石塚左玄」ゆかりの地として、地域や学校、関連団体と連携しながら、阪谷で採れた食材を味わえることの喜びや食育の重要性などを広く伝えていきたい。

「陶芸の魅力づくり」においては、拠点施設が整備されたの契機に、陶芸作りが観光体験プログラムの1つとして実施できるよう、さらに関係者と協議していきたい。